

第11回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成26年1月16日（木） 午後6時～8時

場所：職員会館かもがわ3階 大多目的室

出席委員（敬称略）：

池坊由紀会長，潮江宏三副会長，河瀬直美委員，小泉雪奈委員，佐野真由子委員，鈴木晶子委員，建畠哲委員，富永茂樹委員，畑正高委員，福西惟次委員，増田寿幸委員，山本淳子委員，藤田裕之委員

事務局：

奥美里 文化芸術担当局長，永井久美子 理事，森川佳昭 文化芸術都市推進室長，北村信幸 文化芸術都市推進室文化財担当部長 ほか

- 1 開会
- 2 京都市文化芸術都市創生計画の取組状況について
事務局から報告
別紙のとおり意見交換
- 3 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<会長>

事務局の報告を伺っていると、かなり高いパーセンテージで施策に着手され、進捗しているのではないかと思う。東京オリンピックを控えて、日本、京都が注目を集める中で、ハード、ソフトともに大きな転換期を迎えていると感じる。

ここからは全体を通して、各委員から御意見、御提案を伺いたい。皆さんの疑問に対して事務局から回答するという形になりがちだが、できるだけ委員の間で議論を深めていきたい。進捗状況について、又はもう少し大きな目を見て、将来の京都の文化芸術のためにこうすればもっとよくなるということがあれば仰っていただきたい。

<委員>

冒頭の藤田副市長のお話にもあったが、東京一極集中ということを私も感じる。これを分散させねばならないという発想が一般的だと思うが、私はなかなか難しいと思う。

歴史的に見れば、二極集中であった時期がいくつかある。その一つは江戸初期。講釈で申し訳ないが、禁中並公家諸法度が定められ、公家は政治経済に関わってはならない、というものを作ってバランスを取った。そのことによって逆に文化については、武家は分かっていないということになった。今の京都の可能性もそこにあるのではないかと思う。

このように考えると、琳派 400 年記念事業は、琳派だけでは済まないことになる。京都は文化の渦を起す責任があると肝に銘じていただきたい。

国立京都伝統芸能文化センターを整備するという話は、京都の伝統芸能の話だけではない。日本伝統芸能文化センターであるべきだ。建都 1200 年の際に、全国 4 万の祇園祭が京都に集まった。私たちが思う以上に、京都の文化は全国に強く関わっている。

昨年暮れに、全国高校生伝統文化フェスティバルが京都コンサートホールで開催された。高校生の 3 年間でこんなパフォーマンスができるようになるのかと思うような、凄いレベルだった。伝統文化の甲子園ということだったが、何とか NHK で全国放送してもらえないかと思う。

伝統芸能文化センターもものすごく大きな可能性がある。是非、大切に進めていただきたい。

また、子どもたちの育成についてだが、皆同じように伝統文化を体験するというのも大切だが、それでは年に何回かで終わってしまう。それだけではあまり意味がない。可能性のある子どもには、スポーツと同じように、専門的に育成していく仕組みが欲しい。

あと、国立京都歴史博物館の整備だが、これも京都にこそ作られなければならない。MIHO MUSEUM で実践されたように、一度山を切り崩してもまた緑を取り戻すという手法もある。東山のドライブウェイの辺りを地下 1m だけ掘って、ワンフロアの博物館にし、また土を戻すということが可能ではないかと思う。西に落ちていく夕日を見ながら、日本の歴史を概観する、そういうダイナミックな博物館を構想してほしい。

<委員>

去年流行語になった「おもてなし」という観点で申し上げる。

この 1 年間を見ても施策の 76% が実施済みということだ。私は大学を出てから 55 歳まで、京都を離れ、海外や東京で過ごし、建都 1200 年の頃に京都に戻ってきた。もっとひなびた印象だったが、非常に様変わりし、京都はこんなに面白いのか、と感じた。そういう意味では、文化芸術を提供するという点ではかなり進展していると思う。京都市の各部局の御尽力の賜物だと思う。市のアンケートで「幸せですか」という項目があるが、そういうことを反映してか、この 2 年程は 70% 以上が「幸せだ」と回答している。私は、これはとても驚いた。

一方で、「おもてなし」というのは相手があることで、相手がどう思っているかということが大事だ。

情報機能の強化ということで言うと、施策のことをホームページで拝見すると、確かに色々書いてあるものの、なかなか分かりにくい。市民は市民しんぶん等で知る機会があるだろうが、市外の方はそういう機会もない。

海外から見ても、アメリカの富裕層対象の観光に関するアンケートでは、京都は9位から5位に上がっている。京都は文化的に得るものがあるということで、当審議会にとっては喜ばしいことだ。一方、アジアから見ると、京都は、富士山や箱根、東京に比べると大分レベルが低いということのようだ。京都については歴史的な建物があるという程度の認識だ。

最近是我のような年輩の者も、ホテルはインターネットで予約する時代だ。市から提供されている情報を一つ一つを見ると詳しいことが書いてあるが、逆に言うと、一つ一つ見ないと分からない。インターネットの言葉で言えば、ポータルサイトがない。言葉を変えるなら、「京都駅」というものがない。駅に行けば、どこそこに行くには何番線に乗ってということが分かるが、そういうものがない。情報の玄関口を作っていただいて、折角の取組をうまく伝えていただきたい。

それから京都市の発信は、他都市に比べると地味なように思う。これは京都人独特の、知っている人が知っていればよい、という感覚も背景にあるのだろう。例えば、民間で「e-KYOTO」というものがあるが、カラフルな写真もたくさん使われている。こういうものとうまく連携して、市の情報発信に活かされてはどうか。

色々なことをなさって成果が上がっているとは思いますが、市外の方たちにどこまで知らしめているかは疑問だ。民間とも連携し、ポータルサイトを作ることを御検討いただきたい。

<委員>

私は今日初めてこの委員会に出席した。様々な御説明を受けて、強く感じるのは、初めて聞く言葉が膨大に出てきて、到底処理できないということだ。先程御指摘があったことにも関連するが、一つだけ申し上げたい。

資料は数としては多くないが内容は膨大なので、資料冒頭の「伝統芸能文化の更なる創生に向けた取組」についてだけ述べる。国へ要望していくということは、これは特に異論はない。名称について、先程、御指摘のあったように、「京都」ではなく「日本」伝統芸能文化センターなどと少し大きなものにする方がよいかなという程度だ。

もう一つの点がよく分からない。今回見直しをし、創生座に代わる事業として「伝統芸能みくらべ公演」を実施とあるが、どうして創生座ではいけないのか。従来の創生座は自主的な取組として活動を継続とあるが、何故わざわざそういうふうにするのか。変える理由がよく理解できない。

モデル事業として実施しているものを、何故、わざわざ名前を変えるのか。

<事務局>

京都伝統芸能文化センターの整備に向けてだが、内容としては、京都だけではなく全国各地の伝統芸能の発展を目指している。名称については、確かに趣旨と合致しないところもある。

また、センターの先取りということで、様々な伝統芸能をコラボレーションというか、様々な演者にお集まりいただいて始めたのが創生座だ。国内だけではなく海外にも招聘され、公演をしてきた。

最初に想定していた「座」は、いわゆる「一座」というものではなく、演者と鑑賞者の積極的な関係であり、色々な方が関わってやっていこうということだった。実施から数年が経ち、当初からのメンバーが、行政の支援は受けず、独立して自主的に活動していくという方向性を出された。我々も新たに内容を検討し、25年度については、「伝統芸能みくらべ公演」を実施することとした。能とダンスとの関連性を見比べるなど、この3月に実施する。モデル事業として実施してきたが、少し模様替えをしようという状況である。

<委員>

メンバーが固定化してきて、それを換え難いので名前を換えると聞こえた。詳しくは分からないので、それを駄目だと断じることはできない。

ただ、これだけ色々な言葉が出ており、またそういう事情でクルクルと名前が変わるというところに、先程他の委員からも御指摘のあった、分かりにくさが表れているのではないかと思う。折角よいことをしているのに周知徹底されない。事業は換えればよいというものではなく、断じて変えないで、徹底して、分かってもらうまでやるということがよい場合もある。

重要施策の一番に掲げておられる事業を、その程度の理由で換えられるということでは、誠に遺憾だ。

<会長>

創生座の見直しに関わっておられる委員もおられるが、何か補足があれば。

<委員>

私自身はメンバーが「固定化」したとは考えていない。この数年間で創生座は随分成長しており、それを評価したいと考えている。

実は、創生座として活動していただいた演者の皆さんは、「ようこそアーティスト」等にも協力していただいております、ありがたく思っているところだ。創生座というものが独立してあるというよりは、創生計画の様々な施策と関わって、十分にやってきていただいた。それとともに、創生座も大変成長した。

これまで創生座として活動してきた彼らが、創生座という名前を残しながら、自主的に活動していくということだ。

私個人の期待かも知れないが、創生座に今後一切支援しないということではないと考えている。現に、旧創生座のメンバーは、来年度も自主的な活動をするため、計画を練っておられる。彼らが自立して改めて活動していく折に、支援はなくなる。例えば、場所のことで言うと、芸術センターが中心になって、色々な形で新しい創生座を支えていきたいと思う。

創生座に代わると書いてあるが、「伝統芸能みくらべ公演」は、伝統芸能文化センターに向けて動いていくための一つの端緒だ。これだけで終わるわけではない。「伝統芸能みくらべ公演」は年度内の実施ということで急いで考えたものだが、来年度以降、新たな形での展開ができると考えている。また、それについての京都市の強い支援もあると考えている。

<委員>

よく分からない。

京都創生座をモデル事業として実施する、ということの主語は「京都市」だ。それが、創生座が独立してしまうという。

<事務局>

経過から御説明する。

国立京都伝統芸能文化センターを整備していきたいということの中で、ハードについては毎年国に要望しているが、ソフトについては、イメージを示すための一つの取組として平成19年度から京都創生座を実施している。

京都創生座で育ったメンバーが、自分たちの力で、創生座の名前を使っていただいて…

<委員>

そこが分からない。

私は信用金庫の人間なので、その感覚で申し上げる。お金と時間をかけて、創生座というブラ

ンドを作り上げた場合、それは成果物だ。それが作った人の手から離れていくというのが分からない。

私の常識から言えば、京都創生座で育ってこられ、自分で自立してやるんだという時には、創生座という名前ではなく、違う名前でなさるのが当たり前だ。平成19年度から市がやってきた事業で、折角ブランドができてきたというものを、他の人に託してしまうのはおかしい。

<事務局>

託してしまうというわけではないが、メンバーが実質的に骨格を作ってきているという経緯もある。

伝統芸能文化センターの整備のために、現在は、創生座を含め「五感で感じる和の文化事業」という枠組で様々な事業を展開している。これをセンターの整備を推し進めるために見直そう、という一環で、その最初として「伝統芸能みくらべ公演」を実施する。その際に、創生座のメンバーとも連携しながらやっていく。

<委員>

初めての者がこれ以上言わないが、それであれば、「創生座をモデル事業として実施」ではなく、「創生座支援事業をモデル事業として実施」とする方がよいと思う。平成19年度からなさってきたものが、突然市とは関係ない事業主体がやるということでは、聞かれた時に説明しにくいのではないか。誤解を避けるためにも。

いずれにせよ、そこが主眼ではない。私は、色々な言葉が大量に出てきて、インターネットで検索するにも大変で、何がどうなっているのかさっぱり分からないということを申し上げたい。色々なジャンルの様々な事業をなさるといふ時、新しく予算を得るために、新しい名前が欲しくなるというのは分からないではないが、継続性を大事にする方がよい。よく似た名前の事業がたくさんある。それぞれ良かれと思って担当者が付けておられるのだろうが、誰かが全体の言葉づかいをコントロールしないと、子どものグチャグチャなおもちゃ箱を見せられているような気になる。私だけではなく、普通の市民感覚では皆そう感じると思う。

どの組織でも、言葉や文書をコントロールする部署があると思う。京都市にもあると思うが、新しい言葉を使う時に、その言葉を使ってよいかということのを他の関連文書と比較してチェックするはずだ。それをしないと、率直に言って、見ているだけで嫌になってしまう。私はこの委員も勘弁願おうかと、初回でそう思うてしまうくらいだ。

一生懸命やっておられるのは分かるが、総合的にコントロールしないと。先程ポータルサイトという言葉が出たのもそういうことではないかと思う。

<委員>

イベントでも映画でも、ものを作る時には、共通のイメージが必要だ。創生計画のビジョンは何かということが誰も分かっていないのではないか。これは大きくしよう、これはこの色で、ということが、皆の中で統一のビジョンになっていないように思う。完全に全てを総合プロデュースする人というの必要だが、最初からビジョンが一つではないのかなと思う。

ある一つのことをする時には、最初に全ての要素を並べ挙げて、そこから何が残るのかを考える。それをやって、皆さんの共通のビジョンにしていく。

計画が始まって、7~8年目だと思うが、例えば事業を通じて誰がスターになったのかとか、食のことで言えば一般家庭の主婦がそれを本当にやっているのかとか、事業として実施することと同時に、普段の生活の中に根付いていく、ということを着地点として考えるのがよいと思う。

行政はしばしば部署が変わったりするので、ある固定のビジョンがある方がよい。それが「京都」でもよい。

<委員>

生活文化から伝統芸能まで、全部をカバーしなければいけないということでこれだけの事業になっているのだと思う。

私もこれが全部分かるわけでは到底ないが、私は、「京都」、京都って何だろうということが根幹だと思う。そういう意味で、私の立場からは「古典の日」に絡めて施策を作っていただいているのは、京都が押さえるべき、他にはないポイントだと思う。

また2点目だが、埋蔵文化財について申し上げる。施策番号で言うと47番辺りからだと思うが、京都市考古資料館では、去年、一昨年と、貴重な平仮名資料が出て、非常に頑張っておられると思う。その取組状況を教えていただきたい。

3点目は、どこでこれを伺ってよいのかと思うが、よい機会なので申し上げる。京都は都があったということが大きな特徴だ。数年前に府知事が、皇室の若い方に京都にお住まいいただくということを仰った。それについて具体的に何か取り組んでおられるのか。

<事務局>

昨年の会議でも、埋蔵文化財について御指摘いただいた。ありがとうございました。

藤原良相邸跡での平仮名資料の調査があり、世間からも広く注目を集めた。埋蔵文化財は比較的地味な分野で、一般の方からも理解を得にくく、苦勞しているところだ。考古資料館の実績ということで言うと、速報展を行ったり、簡単なニュースレターを作ったりするなど工夫しており、この数年、毎年最高入場者数を更新している。まだまだ十分でないとは思いますが、そのような状況だ。

<委員>

皇室の関係については、双京構想と言っているが、門川市長も色々なところで申し上げている。東京の一極集中を避けるために、また、皇室のいやさかのためにも、京都には現役の御所もあるので、京都に皇室のどなたかにお住まいいただくのがよいのではないかと考えている。もっと言えば、皇室のどなたかが東京以外にお住まいになるとすれば、それは京都以外ではあり得ないだろうという自負も持っている。

私ども、政財界の色々な方に申し上げてはいるが、ただ、それが一度に実現するとは考えていない。まずは色々な機会に皇室の方に京都にお越しいただく、元々京都にお住まいだったわけだから、身近な第二の故郷として、京都に頻繁にお越しいただくことがきっかけになるのではないかと思う。

ついでに一言だけ申し上げる。

私自身、以前は右京区の区長をしていたが、その前は教育委員会に長く所属し、生涯学習を担当していた。文化芸術の振興を生涯学習という切り口で考えると、「日本に京都があつてよかった」と言っただけ、そういう都市格を築くためには、やはりそこに住んでいる方が造詣があつて、さすが京都の人はすごいなといってもらえるようでない駄目だと思う。

京都に住んでいる方は、いつでもどこでも文化芸術を体験できるということも大事だと思う。また、京都の人は文化芸術を守り育てることに貢献する、次の世代に引き継いでいくということも大事だ。学校教育だけでなく、地域の中で根差した取組が必要だ。

その中で行政もコーディネーター的な役割を果たしていくことが必要だ。

先程御指摘いただいた、行政の情報発信、言葉づかいも含めて、独りよがりの発信になっていないか、市民に伝わらないような表現になっていないかということについては十分に注意しなければならない。

本日いただいた御意見も含めてしっかりやっていきたい。

<委員>

途中から参加しているので、御説明をお伺いした日本食について申し上げます。

私は介護の会社で働いている。認知症の高齢の方をお世話するシステムを運営している会社だ。その中で、日本食の料理人にお越しいただく機会があったが、利用者の皆さんにとっても喜んでいただいた。文化として根付いて愛されているのだなと強く感じた。ただ、若者としては、普段なかなか接することがなく、きっとおいしいんだろうなあと思っても、高そうでなかなか手が出せない。

宣伝して発信するというのも大事だが、他の委員からも御指摘があったように、次の世代に伝えていくことも大事だ。若者の間でコーディネートしていくような役割を、行政に期待したい。

私も昨年まで大学生だったので、なかなか本格的な日本食を食べる機会もなかった。試食できるようなイベントがあれば行ってみたいと思う。

<委員>

私は、多少海外で過ごした時期もあるが、主に東京で生まれ育ち、京都に住んでそろそろ4年になるというところだ。

京都のまちなかに住み、文化政策という関心を持って眺めていると、非常によいと思うことが一つある。それは、やっていることが“見える”ということだ。Visibilityが高いと言うのだろうか。

東京であれば、非常にお金をかけて一生懸命イベントをやっても埋もれてしまう。巨大なフェスティバルをして、あちこちに旗がはためいていても、ほとんど気付かれずに終わってしまうということがある。東京で文化政策を検討する仕事をしていた時は、Visibilityが生まれないということが大きな課題となっていた。京都ではそれが確保されている。これだけの歴史ある都会でありながら、まちなかにおいて、道の広さ、建物の大きさなど、規模が人間サイズであるということが大きい。むろん、郊外では事情は異なると思うし、規模が人間サイズであるというのは時に限界にもつながると思うが。その中で、誰かが何かをやった時に、特に注意していない人でも、意外とハッと気付く。これは長く京都におられる方には当たり前になっていて、長所として気付きにくいかも知れないが、もっと大事にされてよいと思う。

今日は大きな施設の整備の話もたくさんお聞きした。それはそれで文化の拠点となっていくということで大切だと思う。しかし、色々なところで同時多発的に、身近に、しかも風景に映えて新旧様々なことが行われ得るまちだということは、それだけで財産だ。単なるハード批判ということではなく、そういう点を支援して、お金を割いていただきたいと思う。

時間がないので、もう1点だけ。御報告のあった文化芸術コア・ネットワークに私自身関わらせていただいている。市が手掛けられる事業として大変素晴らしいということをお願いしたい。色々なマネジメントレベルの方、伝統文化の方や、私どものような研究者も入れていただいて、確実な結果を求めない、けれども対話の中から何か生み出そうという精神でつながりを求める、そういうことを始められたのは素晴らしいと思う。設立されてまだ半年だが、ここから色々なことができていくのではないかと思う。文化関係者のコア、まさにコア・ネットワークとして大切にしていただきたい。

<委員>

たくさんの方の事業が色々な工夫の中で為されているということ、今日、改めて感じた。

文化は、教育と教養とセットで文化だ。ものの感じ方や価値観、ライフスタイル自体が文化で、京都人一人ひとりが文化だと言える。恐らく、文化は生きて呼吸している。それが根っこにあって文化事業が成り立っている。それが発信の一つの柱であるとして期待したい。

私は、科学コミュニケーションということを学術会議で実施している。日本科学未来館を中心にサイエンスカフェ等の事業を企画している。分かりにくい科学を身近にし、科学の持っている

よい面も、それから困った面も、両方、市民と一緒に語るということをしている。

私は、京都でならば、科学だけではなく「科学・文化コミュニケーション」という形で出来るのではないかと思う。敢えて文化コミュニケーションと銘打つことで、遠いところにある伝統芸能等を身近に感じられるようになるのではないかと思う。

これだけたくさんの事業をなさっているがゆえに、統一の取れたインパクトのある軸が見えにくくなる。これは行政だけでなく、どこでもそうだと思う。日本は文化を一つの戦略として捉えて、文化を顔とする社会政策が必要だと思う。マネジメントの問題だが、事業を体系化することで事業が見えやすくなる。

京都大学でも、スーパー・グローバル大学ということを行っている。スーパーになると、逆に日本語を学びたいという人が増えてくる。そこまで突き抜けてグローバルということになれば、日本の良さが表に出てくる。例えば海外の日本研究をなさっている方に京都に滞在していただいて、日本を外国語で切り取ればどうなるかということ京都の大学生に教えてもらうとか、そういう仕組みが京都でなら出来るのではないか。そういうことを最近よく話題にしている。

<委員>

2点申し上げる。

一つは、HAPSのことだ。小さな集まりではあるが、行政が中心になりながら、非常に手作り感があってよい事業だ。拡大の仕方も分相応で、よいバランス感覚だと思う。ニューヨークのSOHOのように、成功し過ぎると、それ自体が消滅の理由になってしまうということがあるので、そこは難しいところだが。

もう一つは大きな話題だが、ICOM、国際博物館会議のことだ。3年に1回総会をやるのだが、再来年はミラノに決まっている。総会は、毎回非常に激しい誘致が繰り広げられるが、国立新美術館の青木館長を中心に、文化庁とともに、ミラノの次の回を日本に誘致しようと動いている。誘致委員会は20人程の集まりだが、ひとまず立候補することは決まった。国内でどこの都市にするかということは、委員の9割方が賛成し、呆気なく京都がよいということになった。

モスクワの立候補も決まっているが、2回続けてヨーロッパはないだろうということで、京都が有力な状況だと推測している。既に市長や知事は青木館長と話されていると思うが、誘致委員会として、これから京都に条件を示していくことになる。

3,000人規模の国際会議なので、1~2年前にホテルを予約する必要がある。京都国際会館やみやこめっせを使おうという話が出ているが、少し会場のキャパシティが足りない。課題になるかも知れない。是非御協力をお願いしたい。

オリンピック程厳しくはないと思うが、ほかにも複数の国が立候補するだろうと思う。決定は来年になる。もし決定すれば2019年の開催だ。決定と同時に京都に事務所を置いて、準備を進めることになる。

<委員>

創生計画に基づきこれだけの事業が進んできたわけだが、施策はそれぞれ元になる創生条例に基礎を置いている。条例は、項目ごとになっており、その各条に応じて計画の中身が作られている。ただ、条例は各条に分かれてはいるが、精神としては条例全体が問題なのであって、各条ではない。施策も、いくつかの条文に関わるというものがある。

今日私は、初めて食文化の資料を拝見した。今少し読んだ限りでは、恐らく条例の第8条、暮らしの文化に関係すると思う。それは当然の前提であるということで、この文章の中にはどこにも「暮らしの文化」という言葉が出てこないのだと理解している。先程の説明では地蔵盆も認定の方向だということで、条例を作る時に考えていたことが実現すると喜ばしく思っている。是非、食文化は、第8条、暮らしの文化に関係するという自覚を持って取り組んでいただきたい。

また、暮らしの文化はただの生活文化ではない。「京都の」暮らしの文化だ。ここで大切なのは、

京都にしかないような風景、また、世界遺産に指定された社寺のその傍らで営まれている文化であること、そのような点だ。これらはまちづくりにも大いに関係している。第13条で地域のまちづくりの話が出てくるが、先程他の委員も触れられたHAPSは、地域のまちづくりに深く関連している。その関連性を改めて理解して施策を実践していただきたい。

<委員>

創生計画ができた時に市立芸術大学にいたので、創生座も拝見した。伝統芸能文化センターの整備に向けた事業であったと思う。

創生座に比べて、今度の「伝統芸能みくらべ公演」は啓蒙的過ぎないか。それを少し懸念する。もっとクリエイティブなものにするなど、演者が変わっても精神は受け継がれる方がよい。

<委員>

「みくらべ公演」はチラシ等を御覧いただければ分かるが、決してそのようなものではない。啓蒙的な事業は、また別途実施している。

<委員>

その方向でよろしくお願ひしたい。

京都の伝統芸能が危機に瀕しているということは、日本伝統音楽研究センターの先生方からよく聞かされている。その辺の危機感は行政もお持ちいただくようお願いしたい。

また、子どもたちの育成は創生計画の大きな柱であると理解している。芸術大学でも、日本の伝統音楽の大学院を作って、先生方だけでなく若手も入れていこうとしている。人材の育成については大学の方でも協力できる体制が整ってきている。多少貢献できるだろうと思う。全体の柱は、やはり文化市民局の事業だろうから、芸大の事業は、計画の中では付け足しのようなことだろうが。

もう一つ。既存の機関としてのコンサートホール等の位置付けが、計画の中ではっきりしない。再整備ということになればはっきり書かれるが、普段の活動については詳しく書かれていない。当然やっていくべきということだろうが、実は重要なことだと思う。

<会長>

京都の文化芸術の施策を分かりやすく発信していこうという御意見が多かったように思う。

京都市におかれては、各委員からの御意見を施策にしっかり反映され、御提案に応じていくようお願いしたい。

それでは本日の議事はこれで終了する。ありがとうございました。

(以上)